

sama「平等」 eka「同一」
－『法華經』における三乗と一乗を中心として－

李暎実

「平等」と漢訳される sama と「同一」と和訳される eka の語が含意するものは異なる。本稿のコンテキストにおいて「平等」とは、二つ以上のものに平らかに等しくはたらきかけることであり、「同一」とは、二つ以上のものが区別できないほど同じであるということである。より具体的には、「平等」が「全員に同じ機会が与えられること」を示す一方で、「同一」とは「全員が同じ状態である或は同じ状態になる」ことを意味する。前者において主語は仏であり、後者では衆生であると考えられる。

『法華經』における「平等」の概念は、第五章「藥草喻品」の前半に多用される。特に『妙法蓮華經』「佛平等説、如一味雨」に従えば、「平等」 sama と「同一」 eka を同義に解釈する。仏が「平等」に法を説くことは、様々な植物に降る「一（味）」 eka の雨に喩えられる。この「平等」とは、差別なく、同じように、人々に説くことであるが、その部分に「一乗」に対する言及はない。

他方、『妙法蓮華經』の鳩摩羅什訳を欠く、第五章「藥草喻品」の後半にある「器の喩」に、「等しい」 sama 粘土から作られた様々な器があり、容れられるものにより、それらが別異であることを知ると説く。この「別異」は容れられたものを起因とする。『正法華經』「泥本一等、作器別異所受不同」に従えば、泥は「一に等しい」けれども、同一でないものを受容することから、個々の器の「別異」を知ることとなる。この譬喩に続き、「藥草喻品」の後半では、「一乗」と「三乗」に言及するが、その「一乗」には「大乘」と「仏乗」との読みの違いが存在する。

『法華經』「一乗」の思想が、「方便品」に述べる「仏乗」であることは明白である。しかしながら文献によっては「一乗」や「三乗」を「大乘」とする箇所もある。この点については多くの先行研究がなされているものの、統一見解は得られていない。こうした背景から、『法華經』そして仏教が目指す、現代における差別のない社会の実現への道筋は、「一乗」と「三乗」のどちらの解釈にあるのかもここにおいて問うてみたい。

本稿では、ギルギット写本を底本に用いて、漢訳やチベット訳と比較し、「藥草喻品」 sama を「多様性」、eka を「同一性」と仮定し、「三乗」と「一乗」の教義がどのように結びつくかを考察する。この研究は、仏教思想のみならず多様性と平等を考える現代社会の理解を深めることをも目的とする。

<キーワード> : 「藥草喻品」、「ギルギット写本」、「平等」、「同一」